

下野市立緑小学校

1 学校課題

「共に学び合い、高め合い、認め合う児童の育成」
～児童一人一人の学力・学習意欲を高める授業づくり～

2 研究計画

- (1) 全校体制での実践と授業研究
 - 視点①「学級力」向上と学び合う学習集団作り
 - 視点②学習のねらいの明確化と学力の向上
 - 視点③ICT機器の活用と主体的で対話的な学習
- (2) 主な校内研究会
 - ①S&Uコラボでの授業研究（研究の視点①および③）
 - ②特別の教科 道徳の授業と評価実践研修会
- (3) 研究のまとめ
 - ・成果と課題の確認と次年度の課題検討



3 研究内容

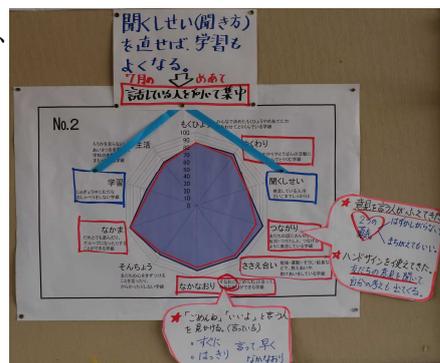
本校では、児童の学ぶ意欲の向上を図るため、上記の研究テーマを継続して研究に取り組んできている。昨年度は、これまでの算数に加え理科や国語を取り上げ、グループ学習での学び合いや活用力を高める授業展開とICT機器の活用に焦点を当てて研究し、児童の学習意欲の向上や教師の授業力の向上に役立てることができた。

今年度は、学び合いをより深めるために、その基盤となる学習集団作りについて「学級力向上」を手がかりに考えることを新たな課題として加えた。また、タブレットなどの整備計画に合わせて学び合いのツールとしてのICT機器のさらなる活用についての実践的な検討を継続することとした。また、いよいよ始まった「特別な教科 道徳」の評価について、実際の授業と児童の見取りに基づいた研修を行うことにした。それらにより、新しい学習指導要領の趣旨を実現するために教師に必要な授業力、児童の学力、それらを繋ぐ環境や教材などについて、これまでの成果を整理し追究していきたいと考えた。

4 研究の実際

(1) 学級力アンケートの実施

学び合う集団作りとしての学級力向上の手立てとしては、田中博之氏の提唱する「学級力向上プロジェクト」を参考に学級力アンケートを定期的の実施した。アンケート結果が可視化されたレーダーチャートをもとに児童自身が学級のよいところやめあてとしたいことを話合う活動を行い、それぞれの教室に掲示した。実施していくごとに、学級の実態やめあてを自分事として主体的に捉えようとする学級の雰囲気が作られ、活発な話し合いが行われてきている。



(2) 授業研究

①2年生活科「どきどき わくわく 町たんけん」

研究授業では、グループごとによる町探検を振り返り、みんなに発表して発見したことを共有するための準備活動が行われた。機器を活用し、探検の際に撮ってきた写真を映し出して発表内容を話し合う場面では、ICT機器ならではの記録の仕方が、探検の振り返りや話し合いを活発にしていた。また、担任や児童同士の相互理解に基づいて個々の児童を尊重し合う関係性が、対話的・協働的に学び合う学習活動に生きて働いていた。学習集団としての学級作り(学級力向上)の大切さを改めて確認することができた。

② 4年理科「もののあたたまり方」

今年度後期から各学級にタブレット型PCが導入され、各教室で様々な教科に用いたり複数台をグループ（児童）に配分して児童自身が使ったりするなど本格的なICT機器の活用を行う上での条件が整った。

この授業の導入では、学習の連続性や課題の明確化を意図して前時の活動や考察を画面に映し、本時の学習課題に関連付けて考えさせた。参観した宇都宮大学の教授からも、板書や提示資料などを簡単に画像に記録できる利点として、教室に常時タブレットがあることを勧められた。機器を日常の授業の道具として簡単かつ有効に機能させていく上での示唆をえた。



③ 6年理科「てこのはたらき」

この仕組みを生かした生活用具を、支点・力点・作用点の位置に着目して3つに分類し、それぞれの仕組みやてこの働きについて考える活動を行った。児童はてこを利用した6つの生活用具について主体的、意欲的に実験したり、グループ内や全体での協働的、対話的な活動をよく行ったりした。また、みんなで考えを深めたい場面でICT機器（書画カメラ、タブレット）が児童自身で活用でき、効果的だった。研究の視点①と③それぞれの成果が授業に現れていた。



④ 道徳の授業と評価に関する研修（1年「こまっているともだちに」）

今年度より実施している「特別の教科 道徳」に関しては、通知表や指導要録へ記述する評価について実践を通して考えることが必要であった。そこで、道徳の研究授業を行い、授業者と参観者全員とで、授業での児童の見取りからどのように評価し、所見文を起こしていくかについて研修した。一単位時間だけで道徳の時間の評価を考えることには限界もあったが、実際の授業を基に評価について考えたことの意義は大きく、参加者それぞれに通知表や指導要録の評価についての理解や所見文の実際について見通しをもつことができた。

5 本年度の成果と課題

- 学級力アンケートとその結果を共有し合う話し合い活動が定期的に行われたことで、児童自身も自分たちの学級のよさや課題を意識しながら、「よりよい学級にしたい」「互いに認め合い学び合っていきたい」と主体的に考えるようになってきている。学業指導に課題がある学級でも児童同士が声を掛け合う姿が見られ、アンケートの結果には必ずしもはっきりとは表れていないが意識や行動は変容している。

一方で、学級力アンケートの結果に顕著な変化が見られなかったり、定期的に行うことでマンネリ化し意欲の低下がみられたりもする。学級集団作りの手立てとして今後も継続していくには、学級をよくしていこうと思いついて行動している小さな変容を捉えて自覚させていくための、具体的な学級力向上策が工夫されていくことが必要である。

- 研究單元以外でも多種のICT機器を様々な場面で活用した各担任の試行錯誤が児童にとって機器の活用の場を増やすことになり、授業を活性化することにも繋がっていった。

実践事例を共有し合いICT機器が有効に働く單元や学習場面で効果的に活用していくとともに、思考や学び合いを活性化させるその他のツールや指導法など様々な視点からの検討と関連付けてみることで、学校課題のテーマや新しい学習指導要領に示された授業像や学力観に繋げていきたい。

- 道徳の他にも新しい学習指導要領の趣旨を具現化するために理解を深め取り組むべきことは多々ある。そこに近づくためには、学校課題研修や中学校区小中一貫教育などの研修の機会を生かしたり職員各自が自己研修したりすることが不可欠である。それらが上手く関連し合って幅広く深く、効率的な研修になるような取り組み方を考える必要がある。